

## 地方美術館・博物館からの発信と連携

日本経済新聞社文化部編集委員

宝玉石彦

美術館や博物館の取材をしていて、ふと不思議に思うことがある。公立美術館が必ずのように看板に掲げる地元美術の調査・研究・紹介といった活動の成果があまり伝わってこないことだ。取材が東京に偏るために生じた認識不足かと反省してみたりもするが、少なくとも大都市で開催される西洋美術や古典を紹介する大型展に匹敵するほどの話題になったという話は聞いたことがない。

では、地方美術館が何もしないのかといえはそうではない。ほとんどの公立美術館は地元作家やその地方にかかわる美術や文化歴史の展示室を設けている。紀要や図録には力のこもった論文、丁寧な調査に裏付けられた報告、解説が掲載される。学芸員にインタビュすれば足元の文化を大事にしようとの熱意も伝わってくるし、地域の人々の支持を受けていることも想像できる。

何人かの学芸員には「掘り起こしはかなり進んでおり、蓄積も厚い」という自負の言葉を聞いた。実際、多くの地方公立美術館は埋もれた画家や美術史を組織的に調査したり、かわりの深い作家の大規模な回顧展を開いたりしており、注目にあたいする企画展も決して少なくない。

取材範囲が限定されているのを恐れずに言えば、和歌山県立近代美術館で二〇〇〇年に

開催された明治・大正期の画家、田中恭吉の回顧展はとくに心に残った。萩原朔太郎の詩集『月に吠える』に鮮烈な挿し絵を残しながら、早世したために一般には半ば忘れられた格好だった田中の事跡を、出身地の地の利を生かして調べ上げたり、作品を集めたりし、その際立った才能を没後八十年余りにして再認識させた展覧会だった。

同展は、日本の近代絵画が本格的に離陸する明治末から大正初期の美術のイメージを豊かにしたのみならず、新鮮な驚きを与えてくれた点で地方美術館という存在のありがたみを改めて感じさせた。それを支えたのは前向きな意味での地方からの問いかけであり、「町おこし」「村おこし」といった地域限定の発信や、いわゆる中央志向からは生まれない成果だった。

万鉄五郎記念美術館（岩手県東和町）と芦屋市立美術館は地方に根差した活動を徹底しており、存在感がある。万鉄五郎、吉原治郎、具体美術協会といった全国レベルでも知名度の高い作家、グループを足がかりに、世界に向けてさえ情報発信できる研究センターの体裁を整えつつある。さらに北海道の取り組みも見逃せない。道内にかかわる美術史の発掘に熱心であるのみならず、道立美術館を中心に数多くの美術館がネットワークを組

んで情報を交換し合っている。

そうして開かれた展覧会や、紀要、図録などに紹介された作家や作品あるいは美術史に触れ、優れた個性や予想外の事実に出合っって新鮮な思いにさせられることがある。中央で認知された美術ほど広く知られていなくても、またそれほど洗練されていなくても、その荒削りなところや素朴さが新しい発想をうながす起爆力を秘めている場合もありうる。何よりも、東京や近畿に集中する文化や美術の拠点が広がり、地図が塗り替えられるのを見るのは地方にとっても刺激になる。

私立美術館の閉館や縮小が話題になる時世だが、公立美術館は予算に悩むことはあっても総撤退する事態は当面考えられない。しかも、都道府県が複数の美術館・博物館を抱えるケースが目立っている上、市町村立館も増えている。看板だけというところも少なくないとは言われるが、そうした動きが十年あるいは二十年以上前から全国規模で進行していることを考え合わせれば、散見される企画展や紀要などで公にされた成果は氷山の一角であり、水面下には相当な蓄積が隠れていると想像できる。

着実に厚みを増していると思われるそうした成果があまり目につかないのは、掘り起こす側にも受け止める側にもローカルな話題に

すぎないという意識が潜んでいるせいかもしれない。そもそも公立美術館が盛んに建設された背景には、一種の文化的な虚栄心や右へならえ方式の心理が働いていなかったとは言いが切れない。「箱もの」という揶揄（やゆ）の声もしばしば耳にした。公立美術館の建設がブームのようになった時期に、西洋の有名画家の絵を競って看板にした事実や、現在も地元を美術を地味な存在にとらえ、「調査費さえ十分に出ない」といった嘆きの声が聞こえてくる点にも、公立美術館が抱える問題が見え隠れしている。

地方の文化や美術、歴史の個別的な掘り起こしが大事なことは言うまでもないが、それだけで終わり、細々とした紹介に終始するのではいかにも寂しい。もっと広い範囲で対話が行われ、大きな視点で意味づけがなされて初めて、地方、地域の垣根を踏み越えた関心を呼ぶことができる。それが実質のある郷土の誇りになり、町おこし、村おこしにも結び付き、美術館・博物館が地域の中で生きた活動を展開できる。

人を引き寄せるに足る料をこらした建築デザイン、の公立美術館・博物館が少なくない。中には巨大と呼んでもよさそうなぜいたくなくつくりの施設もある。しかも、程度の差はあれ、メディアセンターとして機能しうるだけ

の設備を備え、専門的な教育を受けた人材が集まっている。足元の文化や歴史を調査・研究・紹介できるハードとソフトを備え、交流の場ともなる高度なコミュニケーションセンターがこれほど全国に広がり、地域に根を張った時代はこれまでになかった。

北海道の例のように、それらの一つ一つがメディアセンターとなり、それぞれの地方、地域で発掘した文化や歴史がそのネットワークを通じて紹介されたり討論されたりすれば、おのずとその意味が問われ、より広域の人々に向けた発信が可能になる。

